

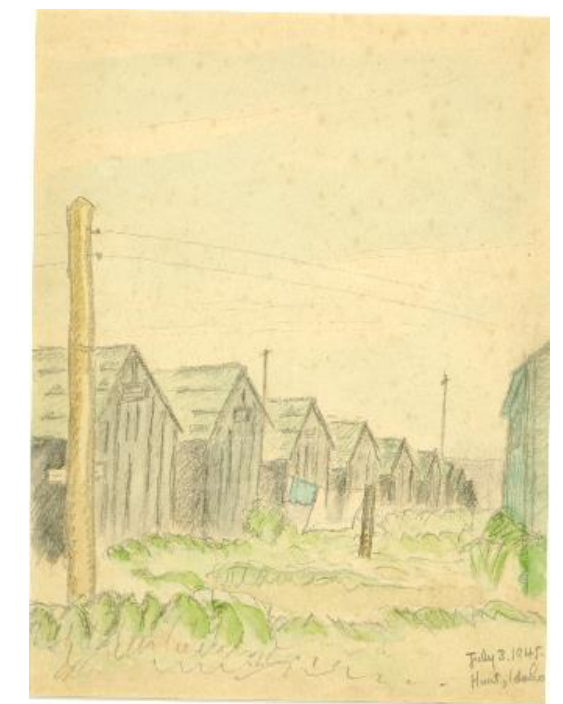
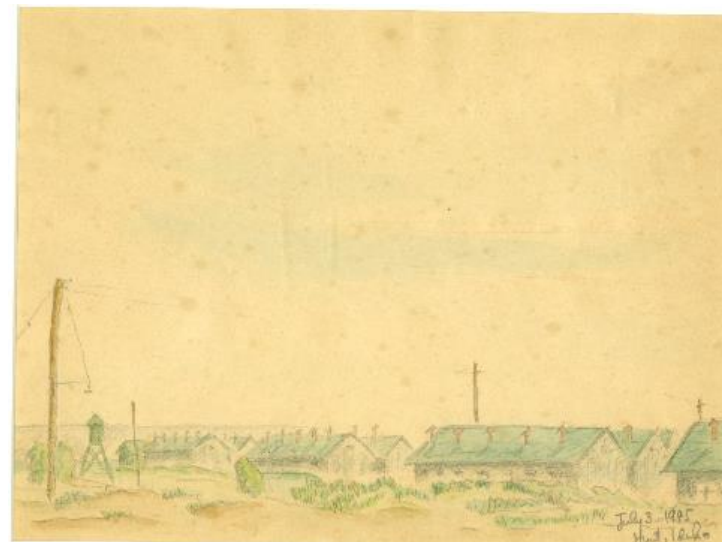


① 収容所に行く砂漠が描かれている。砂漠がどういう所か説明するのは難しい。その説明だけで1冊本がかけるかもしれない。

② 私の収容所は、ミネドカと呼ばれた。収容所から一番近い町まで行くのに30マイルあった。

③ 私の入れられている収容所の鉄条網が並んでいる。これは収容所の周囲の夕景である。

④ 収容所の全景を遠くの方から見た絵である。一万人の日本人は、42のバラックの中で暮らしたのである。



⑤ これも遠景であるが、右の赤い煙突は病院。右と左の隅に見張り塔がある。

⑥ バラックの遠景。電線に注意。電灯は私たちが収容された初めの日からついていた。

⑦ リクリエーションホールと見張り塔。日曜日に礼拝が行われた。日曜日以外の日は、ダンスや劇やいろいろの会合に使われた。

⑧ バラックの絵……。洗濯もの（中央）に注意。





⑨ 便所。便所もまだ出来ておらず、中に大きな箱があり、六つの穴が空いていて最大六人が利用できた。女の子で恥ずかしくて困っていた子もいた。



⑩ 鉄条網の上部に斜めに小さな板が付いているが、この付きかたによって、何方から来るものが「敵」であるかわかる。この絵では右から敵がくると想定されている。



⑪ これは私の部屋から見たアイダホの砂漠。



⑫ 私の部屋のなかの「大きなストーブ」。少し離れると寒い。



⑬ 私たちの部屋の内部。



⑭ これはバラックの近景。この頃になると、近くに小さな運河が建設され、草花を植えることができた。



⑮ 冬は寒くて零下 30 度という夜もあった。ひとつのバラックに六室あり、六家族が住んでいた。この頃になると、小さな植木をうえる「心の余裕」ができてくる。



⑯ 大分、収容所の生活に慣れてきた頃の春の絵。この頃になると、小さな運河ができ、住み良くなってくる。





⑰砂漠のなかで「花」が咲いた。「大きな喜び」。



⑱ヘイ・フィーバー（花粉症）で苦しんでいる図。



⑲収容所のそばを流れる運河で小さな魚を釣った時。



⑳歌を歌っている。その歌は「Behold the man」と書かれている。



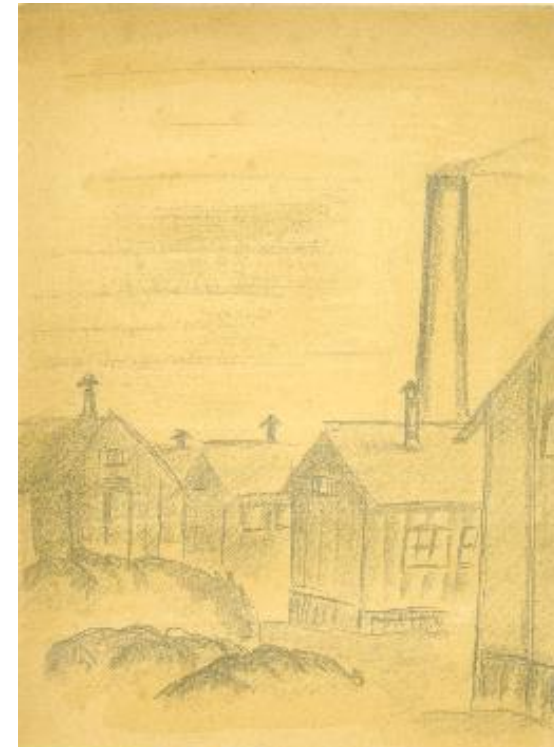
㉑イント（収容所内の教会）で、始めて「指揮棒」を振った時の絵。「楽しい日」だった。



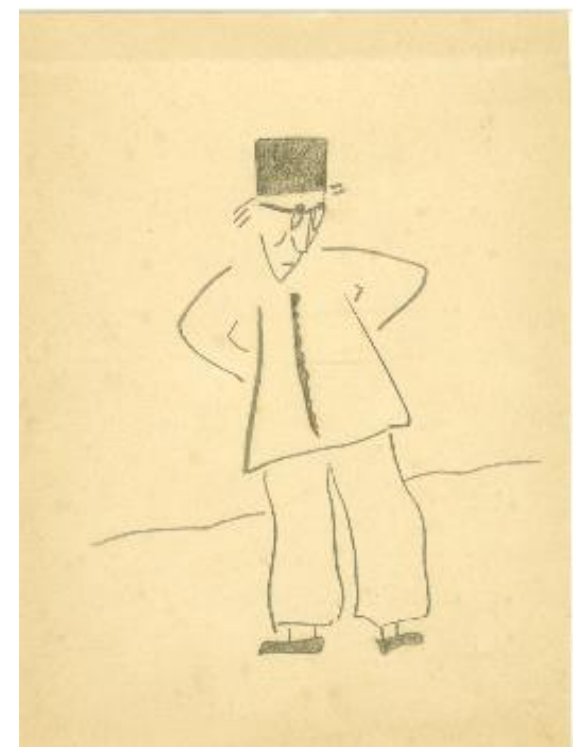
㉒メス・ホール（食堂で大勢と一緒に食事をするが、その時の光景）。コックをしていた人は、シアトルの大きな食堂の主だった。



㉓冬の寒い時、毎日、石炭を運ぶのが、私の仕事。



㉔病院の煙突。戦争後、この収容所は閉鎖するが、後日日本人をここに入れたことが問題にならないように、アメリカ政府は、直ぐ、みんな破壊してしまった。



㉕不明。この帽子は、普通の防止の縁を鋏で切ったもの。

